
仮面ライダーカブト 3rd stage

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーカブト 3rd stage

【Nコード】

N8702A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

7年前、突如地球に飛来し、日本・渋谷に落下直撃した巨大隕石――通称「シブヤ隕石」――によって周囲地域は壊滅。隕石は人的にも多数の被害を与え、7年後の現在でも渋谷は復興されることも無く封鎖されている。だが、これらの災厄は終わった訳ではなく、すべての始まりにすぎなかった。

プロローグ（前書き）

ようこそ、「仮面ライダーカブト 3rd stage」の世界へ。
此処では、原作とは全く違ったオリジナルストーリーを紹介したい
と思います。

勿論、2nd stageとはリンクさせたいと思っています。
では、3rd stageをお楽しみ下さい。

プロローグ

7年前、突如地球に飛来し、日本・渋谷に落下直撃した巨大隕石――通称「シブヤ隕石」――によって周囲地域は壊滅。隕石は人的にも多数の被害を与え、7年後の現在でも渋谷は復興されることも無く封鎖されている。だが、これらの災厄は終わった訳ではなく、すべての始まりにすぎなかった。

隕石落下直後より地球人類に擬態し街中を白昼堂々と活動、次々と人を殺しつつ繁殖する正体不明の宇宙生命体の人々に恐怖をもたらしていた。「ワーム」と呼ばれるその生物を滅ぼすため、人類は秘密組織「ZECT」を結成。しかしワームのもつ、目にも留まらぬ高速移動能力「クロックアップ」の前に、ZECTは敗北を重ねる。もはや最後の希望は、完成間もない武装システム「マスキドライダーシステム」のみであった。これを装備し、使いこなせる者が現れれば、ZECTはワームに対抗しうる力を手に入れられるのだ。

第1章：いきなりライダー集結！？

俺の名は、高山^{たかやま}護^{まもる}。

見た目は人間だが、その正体は世間を脅かしているワームだ。因みに、今はかなり忙しい。

何故？

マスクドライダーカブトと命を掛けて闘っているからだ。

「ライダー、キック。」

カブトはゼクターホーンを展開し、ライダーキックを発動した。

「rider kick」

と、電子音を鳴らし、カブトは回し蹴りをした。

俺は回して来た足を抑え、ニヤリと微笑むと、もう片方の足を蹴り飛ばし、カブトを転ばせた。

「死ね天道！」

俺はそう言い、カブトゼクターに攻撃した。

その衝撃により、カブトゼクターは外れ、何処かへ飛び去った。

カブトは変身が解け、生身の体になった。

俺は天道の胸倉を掴み、上へ持ち上げた。

「トドメだ。」

そう言い、俺は長い舌を出した。

「待て！」

俺はその声に対し、

「誰だ？」

と、言いながら振り向いた。

そこには、一人の男がサソードヤイバーを持って立っていた。

「神代 剣。神に代わって剣を振る男だ。」

「あんたか・・・。」

と、天道。

「じいやが言っていた。」

高貴な振る舞いには高貴な振る舞いで返せつてな。」

神代がそう言うと、

「start! (スタート!)」

の電子音と共に地面からサソリの様な形をした動くものが出て来た。サソリの様な動くものはジャンプして神代の手に納まった。

神代はそれをサソードヤイバーに装着し、

「変身。」

と言った。

その瞬間、神代がサソードへ変身した。

「ライダーか。」

俺はそう呟き、天道をサソードに放り投げた。

その時、天道のベルトが外れ、地面に落ちた。

サソードは飛んできた天道を受け止めて降ろした。

「キャストオフ。」

サソードはサソードヤイバーを操作し、

「cast off」

と、電子音を出してアーマーを弾き飛ばし、

「change チェンジスコレジョン scorpion」

と、電子音を鳴らしてライダーフォームに移行した。

「俺と戦おうと言うのか・・・面白い。」

その勝負、受けてやろう。」

俺はそう言い、目にも留まらぬ速さ”クロックアップ”でサソードに近付いた。

だが、サソードも同様にクロックアップをして応戦して来た。

「ほう、俺のスピードに付いて来られるとはな。」

「俺は速さでも頂点に立つ男だ。」

サソードはそう言い、サソードヤイバーを水平に横へ振り回した。

俺は素早く避け、

「危ねえな!」

と、怒鳴った。

「俺の知った事では無い。」

サソードはそう言い、サソードヤイバーを前に突き出した。
グサッ！

運悪く俺の腹にサソードヤイバーが刺さってしまい、サソードヤイバーから毒が出て来て体内に注入された。

俺は意識が朦朧とする中、サソードヤイバーを掴んで引っこ抜く。腹に激痛が走り、

「ぐっ……ぬうおおお！」

と、呻きながらサソードヤイバーを完全に引っこ抜いた。

「clock over」

と電子音が鳴り、サソードのクロックアップが解除される。

「うわあああ！」

サソードは奇声を発しながらしゃがみ込んだ。

「来る……奴が来る！？」

サソードは怯えながら変身を解いた。

「何故トドメを刺さない？」

「それどころでは無い！」

神代はそう言いながらスコルピオワームになった。

「わ、ワームだったのか……。」

と、天道が呟く。

スコルピオワームは、いきなり駆け出し、天道をすっ飛ばしてその場を去った。

天道は地面に落下し、その衝撃で意識を失った。

そこへ、緑のサナギ体が来て天道に擬態した。

擬態したワームは天道に近付こうとしたが、

「待て。」

と、俺が止めた。

「何故ですか？」

と聞く天道ワーム。

「こいつは連れて帰る。」

「人間を連れて帰るんですか!？」

「何か問題でも？」

「いえ!？」

ただ、貴方の様なの方が人間をお助けになるとは。」

「勘違いするな。」

シモベとして利用させて貰うだけだ。

用が済んだら直ぐに抹殺する。」

俺はそう言っで、天道を担いだ。

「あの、マスクドライダーシステムは？」

「持つて帰る。」

俺がそう言っで、天道ワームがマスクドライダーシステムを拾った。ワームである俺は、高山 護の姉・高山 愛に擬態し、天道を高山 愛の自宅へ連れて帰った。

私は天道を部屋のベッドに寝かせ、水で濡らしたタオルを額に乗せた。

程なくして、天道が目を覚まし、

「こ、此処は……。」

と呟いた。

「目が覚めたのね？」

此処は私の家よ。」

私は天道を見つめて言い、

「貴方、上野公園で倒れていたのよ。」

と、付け足した。

「あんたは？」

「私は、高山 愛よ。」

「俺は……。」

「天道を往き、総てを司る男……天道 総司ね？」

「んっ、何故俺の事を？」

「知ってるわよ。貴方、有名なもの。」

「それは光栄だ。」

天道はそう言い、起きあがった。

「駄目よ！まだ寝てなくちゃ！」

私は再び天道を寝かせようとしたが、

「俺に構うな。」

と、天道は言った。

「……………」

「それにしても、美しい……………」

天道はそう言い、さりげなく私の胸を服の上から触った。

「いゃんっ！」

私は甲高い声を出し、天道の手を振り払った。

「すまない……………」

そう言うと、天道は立ち上がり、玄関へと向かった。

「何処へ行くの!？」

私は聞く。

「帰るんだ。」

「外へ出ては駄目。」

「何故だ？」

天道は振り向いて聞いた。

「さっきの怪物が彷徨っているから。」

此処まで逃げてくるの、大変だったんだから。」

「さっきのって……………あんた、そこにいたのか!？」

と天道はびっくり仰天。

「まあ、兎に角そう言う訳だからもう少し此処にいろ！」

俺はそう言い、ワームに変態。

「貴様!？」

天道は、驚きながらカブトゼクターを掴む行為をした。

「無駄だ。」

お前のマスクドライダーシステムは俺が厳重に保管してある。

返して欲しければ俺のシモベとして働くんだな。」

「くっ……………」

天道は言葉に詰まる。

「そうだな・・・。」

お前の妹の樹花を連れて来い。」

「貴様、樹花にまで手を出すつもりか!？」

「おっと、嫌とは言わせない。」

俺はそう言い、天道の胸倉を掴んだ。

天道は怯えながらこう言った。

「お、お前の言う事なら何でも聞いてやるから離せ。」
と。

俺は天道を降ろし、

「東京ドームで待っている。」

と、言った。

天道は外へ出て自宅へ向かった。

「宜しいんですか？」

突然、天道に擬態したワームが現れて言った。

「俺たちの目的は何だ？」

俺は聞く。

「マスクドライダーシステムの回収、資格者とその親族の殺害・・・
ですか？」

「そうだ。」

そしてその依頼人は誰だ？」

「間宮 麗奈ですよね？」

「彼女の依頼は絶対だ。」

どんな手を使っても成功させる。」

俺はそう言い残し、一足先に東京ドームへ飛んだ。
ドームには、既に天道とその妹の樹花が来ていた。

俺は高山 護に擬態し、二人に近付いた。

「あんたは？」

と天道。

「高山 護だ。」

「貴様、ワームか？」

俺は指を鳴らし、

「ご名答！」

と答えた。

「貴様、俺達に何をするつもりだ！？」

天道は聞いた。

「死んで貰います。」

そう言い、俺はワームに変態した。

俺は樹花に、

「先ずはお前からだ。」

と言い、襲い掛かった。

樹花は後ずさりをした。

すると、俺の下ヘトンボをモチーフにしたドレイクゼクターが飛んで来て邪魔をした。

邪魔をしたゼクターは資格者の下へ飛んで行った。

俺はそれを目で追い、資格者を視界に入れた。

「風間 大介！？」

俺は叫んだ。

「君はかなりのの、えっと、その・・・。」

風間が言葉に詰まると、

「頭脳プレイ」

と、横にいた女の子が言った。

「そうそう、それぞれ！」

と、風間が言う。

風間はドレイクグリップを出し、ドレイクゼクターをセットした。
「変身。」

と、風間が言う。

「HENSHIN」

の電子音と共にドレイクに変身し、
「キャストオフ。」

と、ヒッチスロットルを引き、

「cast off」

と電子音を鳴らしてアーマーを弾き飛ばし、

「change dragonfly」

と電子音を鳴らしてライダーフォームに移行した。

「今日こそお前を倒す！」

ドレイクはそう言って先に攻撃をした。

「当たらない。」

そう言つて、ドレイクの攻撃を体を捻って避け、反撃に出る俺。

「うわっ！」

と、腹にパンチが入って怯むドレイク。

「どうしたドレイク？」

お前の力はそんなものか。」

俺はドレイクの弱さに正直がっかりしていた。

「くっ・・・。」

ドレイクは言葉に詰まる。

「見付けたぞ！」

突然、客席の方から声が聞こえた。

俺は振り向き、声の主を確認した。

声の主は、スズメバチをモチーフにしたザビーだった。

厄介なのが出て来たな・・・一度引こう。

俺は羽を広げると上へ飛び上がり、天井を突き破って外へ出た。

「待て！」

ザビーも飛び上がり、天井を突き破って出て来た。

「もう逃げられないぞ。」

とザビーは言った。

どうやら避けては通れない様だな。

俺はザビー相手に先制攻撃を仕掛けた。

だが、ザビーはクロックアップを発動して避けた。

それに対し、こちらもクロックアップをし、再びザビーに近付いて

攻撃をした。

が、またもやザビーに避けられてしまった。

「終わりだ！」

ライダーステイング！」

ザビーはライダーステイングを発動し、

「rider stinging」

と電子音を鳴らして必殺技を出して来た。

俺はそれを受け、ドームの上から地上へ落下した。

「しぶとい奴目。」

俺が立ち上がると同時にザビーはドームから飛び降り、俺に近付いて蹴りを入れた。

「ぐっ！」

と、痛みを堪え、俺はその場から逃げ出した。

「逃がしたか。」

と呟くザビー。

第1章：いきなりライダー集結！？（後書き）

何なんですかこれは！？

と、ツッコミを入れたくなるストーリーでした。

第1章：新生カブト

「はあ、はあ、はあ、はあ……。」
ボロボロの俺は息を切らし、巢に一人佇たたずんでいた。

「クソッ、許せねえ！」

俺は思いきり壁を叩き付けた。

メキッ！

ヒビが入った。

「何で勝てねえんだ！？」

俺は叫んだ。

「それはお前が弱いからだ。」

と、麗奈がやって来て言った。

俺は高山 護に擬態し、

「あんた……いたのか……。」

と、言った。

「資格者とその親族の抹殺に失敗した様だな。」

「すまない……俺が不甲斐ないばかりに。」

「構わない。」

マスクドライダーシステムの回収には成功したのだろうか？

「ああ。」

「ならば次の機会に取っておけ。」

「そう、出来ると良いがな……。」

「どう言う事だ？」

「俺……擬態して以来、人間を一人殺すのに嫌気が差すんだ。
このまま続けると、おかしくなるかもしれない……。」

その発言に対し、

「それは仕方ないですよ。」

と、巢の奥から出て来た天道ワームが言った。

麗奈は天道ワーム見て、

「何故此処に天道が!？」

と驚いて言ったが、それがサナギワームの擬態である事に直ぐに気付いた。

「何が仕方ないんだ？」

「ほら、貴方が擬態した人間は元々人殺しを毛嫌いする人間ですから。」

「おつ、成る程！」

それならあり得るな。」

と、俺はあっさり納得した。

「お前、まさか裏切るつもりでは無いだろうな？」

「麗奈、俺が裏切ると思うか？」

「お前の事だ、何かの拍子に裏切るかもしれないだろう？」

と、麗奈は人を小馬鹿にする様な口調で言った。

「お前って、本当ム力付くな。」

いい加減その性格を直さんと本当に裏切るかもよ?」

「文句なら本物のに言っんだな。」

それと、もし裏切ったら、その時点でお前を抹殺する。」

俺は英語で、

「Oh, it's dreadful. (おお、それは酷い。)」

と、言い放った。

しかし、英語が通じなかったのか、麗奈はチンプンカンプンだった。俺と天道ワームは、そんな麗奈を一人残し、辺りを偵察しに行った。

「護様！」

突然、天道ワームが俺を呼んだ。

「どうした？」

と振り向き、駆け寄る俺。

「あそこ、見て下さい。」

天道ワームはあるものを指差した。

それは、クワガタをモチーフにした青いライダーとアラクネワームルボアが戦っている所だった。

良く見れば、ルボアがライダーに押されていた。
だが、自然と助ける気はしなかった。

「貴方が行かないのであれば俺が！」

天道ワームは擬態を解き、ジェノミアスワームに脱皮をすると押されてるルボアを助けに行った。

ジェノミアスワームは、頭にある二本の角で敵を圧倒した。

それに対し、ライダーはもがくだけだった。

「もう見てられねえ！」

俺はベルトを装備し、

「来い、カブトゼクター！」

と、手を挙げて叫び、カブトゼクターを呼んだ。

カブトゼクターは、それに答えるかの様に飛来し、俺の手に納まった。

「変身。」

俺はカブトゼクターをベルトに装着した。

「HENSHIN」

と、電子音が鳴り、瞬時にマスクライダーカブトに変身した。

「キャストオフ。」

俺はゼクターホーンを180°展開し、

「cast off！（キャストオフ！）」

と、電子音を鳴らしてアーマーを吹き飛ばした。

吹き飛んだアーマーは、ジェノミアスワームに当たり、ライダーを拘束から解放。

当の俺は、

「change beetle！（チェンジビートル！）」

と、電子音を鳴らしてライダーフォームに移行した。

「天道……。」

と、呟くライダー。

「クロックアップ。」

俺はサイドバックルのボタンを押し、

「clock up」
クロックアップ

と電子音を鳴らし、クロックアップを発動してルボアを瞬殺した。
「貴様……。」

と、天道の幻体を出して呟くジェノミアスワーム。
それを見て、

「どうなってるんだ？」

と、ライダーが言った。

「きよ、今日の所は勘弁してやる！」

ジェノミアスワームはそう言って、その場から逃げて行った。

俺は再度サイドバックルのボタンを押し、

「clock over」
クロックオーバー

と、自らクロックオーバーをした。

「追いかけないのか？」

ライダーはそう聞いた。

俺はライダーの言葉を無視してその場去った。
が、変身を解いた資格者が、

「待てよ天道！」

と追いかけて来た。

「今日のお前、変だぞ？」

と、資格者は言った。

「悪かったな。」

俺はそう言い残し、本当にその場を去った。

第1章：新生カブト（後書き）

加賀美突っ込めよオーツ！
と思わせるラストでした。
天然だな、全く・・・。
これからはお前の時代だ。
もっと読者を笑わせてくれ加賀美！

第1章：2回死ぬ天道（前書き）

本編に入る前にキャラの紹介をします。

天道を往き、総てを司る男・・・天道 総司。
マスクドライダーシステム「カブト」の資格者。

彼は「お婆ちゃん」を尊敬しながら自分が世界で一番偉いと思っ
ている傲岸不遜な男でカスクワームの地球での仮の姿。本物はジェノ
ミアスワームの手によって殺されている。

カスクワーム（C a s q u e w o r m）
カブトムシをモチーフにしたワームで天道 総司の本当の姿。

マスクドライダーカブト（マスクドフォーム）

ヒビイロノカネと言う未知の金属で製造された「マスクドアーマー」
が全身を被った姿で、ダイヤモンドの刃でも傷一つ付けられない。

また2.4 mの強化コンクリートを破壊する貫通弾でさえも防ぐ完
壁な鎧^{よろい}。

肉弾戦闘力に優れている。

身長：190 cm

体重：132 kg

パンチ力：8 t

キック力：10 t

ジャンプ力：一跳び20 m

走力：100 mを8.9 秒

マスクドライダーカブト（ライダーフォーム）

キャストオフしてマスクドアーマーが瞬時に弾け飛び、顎のローテ
ートを基準に「カブトホーン」が立ち上がった姿。瞬発力、格闘戦
に優れている。

またタキオン粒子が体を駆け巡って、時間流を自在に行動出来る様
になり、ワームに対抗してクロックアップする能力を有する。

身長：195 cm

体重：95 kg

パンチ力：3 t

キック力：7 t

ライダーキック：19 t

ジャンプ力：一飛び37 m

走力：100 mを5.8秒（通常時）

ジェノミアスワーム（GENOMYAS WORM）

身長：223 cm

体重：141 kg

サナギ体から脱皮した事により、超高速活動を可能とするワーム成
虫体。

地球に棲むアリジゴクに似た能力を持ち、アスファルトやコンクリ
ートの地面の上であろうとも瞬時にすり鉢上の穴を作り出しては獲
物を引きずり込み、頭の角で突き刺して体液を啜る事を好む。

元々はカスクワームのシモベだったが、カスクワームが裏切った為
に敵になった。

第1章：2回死ぬ天道

「麗奈様。」

と、ジェノミアスワーム。

「どうした？」

「高山 護が裏切りました。」

「そうか、やはり裏切ったか。」

奴は私が始末しよう。

お前は奴がマスクドライダーシステムを返す前に天道 総司を捜して殺せ。」

「了解しました。」

ジェノミアスワームは、加賀美に擬態すると天道の自宅に行った。

同時刻、天道は自宅でのんびりと新聞を読んでいた。

すると、樹花がリビングにやってきた。

「朝ご飯出来てるぞ。」

と天道。

「はい。」

樹花は返事をする、席に着いた。

「うわぁ、美味しそう。」

「夏恒例のナスひんやり夏バテ防止料理だ。」

樹花はそれを見て、

「お兄ちゃん、今日の朝ご飯もGood！」

と高評価した。

「その台詞、せりふ食べてから言って貰いたいね。」

と天道。

ピンポン！

天道家のチャイムが鳴った。

天道は玄関に行き、扉を開けた。

「加賀美……。」

と、天道は呟いた。

加賀美は天道に、

「話があるからちよつと来い。」
と連れて行く。

「こんな朝っぱらから何の用だ？」

天道が聞くと、加賀美がジェノミiasワームになり、頭の角で天道を刺した。

天道は、ジェノミiasワームに水分を啜られ、干涸^{ひか}らびて息絶えた。ジェノミiasワームは天道の遺体进行处理すると、天道に擬態して天道家へ入って行った。

その頃、何も知らない俺は天道家の前まで来ていた。

「此処が天道の家か・・・。」

俺はそう呟き、天道家のチャイムを鳴らした。

程なくして、天道が扉を開けて顔を出した。

「貴様、何しに来た？」

「ベルトを返しに来たんだが・・・此処じゃあれだ、こつちへ来い。」

俺はそう言い、天道の手を引いて人通りの少ない路地へと連れ込んだ。

「ベルトを渡すだけで何故こんな所に？」

「そんな事はどうでも良い。」

本物はどうした？」

「本物？」

何の事だ？」

「お前ワームだろ。」

手に触れた時に解った。」

「ほお、相変わらず鋭いですね。裏切り者は・・・。」

そう言つて、天道ワームはジェノミiasワームに変態した。

「マスクドライダーシステム、返して貰いますよ。」

「力ずくで取つてみな。」

俺はそう言い、カブトゼクターを呼んだ。

カブトゼクターは、それに答える様に飛来し、俺の手に納まった。俺はそれを、

「変身。」

と、ベルトにセットし、

「HENSHIN」

と電子音が鳴ると、カブト・マスクドフォームに瞬時に変身した。その後直ぐ、

「キャストオフ。」

と、ゼクターホーンを180°展開し、

「cast off」

とマスクドアーマーを吹き飛ばし、

「change beetle」

とライダーフォームに移行した。

ジェノミアスワームは天道の幻体を出し、

「直ぐに終わらせてやる。」

と言うと、直ぐに幻体をしまった。

「時間掛けると色々と面倒だから瞬殺させて貰う。」

俺は言い放つと、

「クロックアップ。」

と、サイドバックルのボタンを押し、

「clock up」

と、電子音を鳴らしてクロックアップをした。

ジェノミアスワームも対抗してそれを行った。

俺とジェノミアスワームはゆっくりと流れる時間の中で壮絶なバトルを始めた。

ジェノミアスワームの地獄の様な連続パンチ、反撃のラッシュ攻撃に強力なキック。

両者の戦いはいつまで経っても勝敗が決まらなかった。もうすぐクロックアップが切れる頃である。

それまでに終わらせなければ決着は付かないだろう。

「ほらほらどうした!？」

もう5秒立つぞ!？」

とジェノミアスワーム。

勿論、通常の時間軸でだ。

「そろそろ決めさせて貰うぜ。」

俺はそう言つて正拳付きを決め、

「one - two - three」ワンツースリー

と、三つのフルスロットルを素早く押してゼクターホーンを180°展開した。

ビーン、ビリ、ビリ、ビリビリ

と、パワーがチャージされる。

「ライダーキック。」

俺は再びゼクターホーンを展開し、

「rider kick」

の電子音と共に怯んでいるジェノミアスワームに回し蹴りを放った。
ポーン!

ジェノミアスワームはライダーキックの餌食になって爆裂霧散した。

「clock over」

と、クロックアップが解除され、俺は変身を解いた。

護の姿になった俺は一旦擬態を解き、天道 総司へと擬態した。

天道・・・仇は取ったぜ。

俺は笑顔で天道の自宅へ向かった。

今日から此処が俺の自宅だ。

俺は意を決して家に入った。

第1章：料理対決！天道 総司VS生簀 一郎

「よっしゃあ！今日も強いぜオレエ！」

と、ワームを倒して叫びながらガッツポーズをするガタツク。

その元気いっぱいの叫び声はかなり五月蠅かった。

「五月蠅いぞ加賀美。」

と、俺は言い放った。

が、ガタツクの耳にしっかりと行き届いていなかった。

ガタツクは変身を解き、

「天道、何か言った？」

と、聞いた。

「俺は同じ事は何度も言わない。」

「そんな事言わずに教えてくれたって良いだろ？」

やれやれ・・・。

お前のしつこさには嫌気が差す。

俺は変身を解き、加賀美を置いて家路に着いた。

自宅では、樹花がお腹を空かせて待っていた。

「お帰り、お兄ちゃん。」

もうお腹ペコペコ。」

「じゃあスパゲティでも食べるか？」

「私、お兄ちゃんが作るのなら何でも良いよ。」

「ならとびつきり美味しいのを作ってあげよう。」

そう言つて俺はキッチンに向かった。

それから程無くして、とびつきり美味しいスパゲティが完成した。

俺はそれを運び、

「出来たぞー。」

と樹花を呼んだ。

「はい。」

樹花がリビングに入って席へと着いた。

「いったただつきまーす。」

と、スパゲティを頬張る樹花。

樹花は口に入れたまま、

「もぐもぐもぐ！（美味しい！）」

と好評価。

俺は微笑み、

「こらこら、口に入れたまま喋らない。」

と注意をした。

「もぐ、もぐもぐ。（あ、そうだ。）

もぐもぐもぐ。（お兄ちゃんにお願いがあるの。）」

俺は真剣な表情に切り替えて、

「何だ？」

お前の頼みなら何でも聞いてやるぞ。」

と、言った。

樹花はスパゲティを飲み込み、

「明日、友達の誕生パーティーがあるんだけど、それに来る料理人が急用で来れなくなっちゃったの。だから、お兄ちゃんに代わりに来て欲しいんだけど・・・。」

と頼む。

俺は少し迷ったが、

「分かった。行ってあげよう。」

と、微笑んで言った。

と言っ訳で翌日。

俺は樹花のお友達の誕生パーティーに出席している。

会場は人が多い上にとっても広く、個人の誕生パーティーとは思えない程だった。

まあ、それはそれで楽しくて良いが・・・。

それより、とても嫌な予感があるのは気のせいだろうか・・・。

俺の思い過ごしなら良いのだが・・・。

しかし、事態は一刻を争う事になってしまった。

パーティ会場にワームが紛れ込んでいると言う情報が入ったのだ。
勿論、加賀美からの連絡でだ。

何としてでもワームを見付けなければ！

俺は会場内を見回した。

ん、やけに静かだな。

「・・・ちゃん。」

ん、何か聞こえたな。

気のせいかな？

「お兄ちゃんってば！」

気のせいじゃなかった。

「ど、どうした樹花？」

俺は振り向いて聞いた。

「お兄ちゃんの料理、皆不味いつて。」

そんな馬鹿な！？

俺は残された料理を試食した。

「不味い・・・。」

それが食って最初に出た言葉だった。

ん、待てよ。

俺は鮪を使った覚えは・・・。

「俺の作った料理はどうだ？」

突然、後ろで男が言った。

俺は振り向き、

「お前は？」

と聞く。

「人に聞く前に自分から名乗ったらどうだ？」

「どっちが先に名乗るかどうかは俺が決める。」

「ふっ、まあ良い。」

俺は、生簀いけす 一郎いちろうだ。」

「聞いた事があるぞ。」

古来より受け継がれし黒包丁の正当継承者、生簀 一郎。

料理で人の心を操る事の出来る世界で一人の人物だつてな。」

「その通り。」

俺は今自分の力を此处で試している。

見たまえ。

俺の料理を食べた者が暗くなっているだろう。」

ムカ！

「生簀と言つたな。」

お前は料理の横道だ。おうどう

お婆ちゃんが言っていた。

刃物を持った手で人を幸せに出来るのは、料理人……だけだと。
貴様、俺と勝負しろ。

「

「良いだろう。」

対決するのは、お前の得意料理で良いな？」

「構わない。」

得意料理は麻婆豆腐だ。」

「場所は此处で良いな？」

「結構だ。」

こうして、俺と生簀は料理対決をする事になった。

審査員は樹花曰く、

「味に五月蠅い高島 夏子。」

だそうだ。

因みに、闇キッチンルールで、負けたら料理人としての名誉と地位を剥奪されるらしい。

俺とて料理人の端くれ。

そんな事で名誉など剥奪されてたまるものか。

俺はその条件を呑み、キッチンへと向かい、麻婆豆腐を作り始めた。

材料は、木綿豆腐、豚挽肉、青ねぎ、赤唐辛子、土しょうが、ニン

ニク、豆板醬、砂糖、しょう油、酒・かき油、スープ、かたくり粉、

ごま油、粉山椒である。

俺はこれらを調理し始めた。

1・木綿豆腐は1〜2分湯通しして水気をきり、手でちぎる。
2・土しょうがとニンニクはみじん切り、赤唐辛子は種を取って輪切りに。

3・青ねぎは小口切りにする。

4・中華鍋にサラダ油を熱し、豚挽肉と豆板醤を炒め、(2)と青ねぎの半量を入れて炒める。

5・砂糖、しょう油、かき油、酒で味つけし、豚肉がバラバラになったらスープと(1)を加えて煮る。

6・豆腐に熱が通ったら、かたくり粉を同量の水で溶いて加え、次にごま油を鍋肌から加え、ヒーター強でサツと煮る。

7・皿に盛り、残りの青ねぎと粉山椒を散らして完成。

そして、お待ちかねの試食タイムである。

「では、生簀さんの料理から・・・。」

樹花のお友達の高島 夏子は生簀の作った麻婆豆腐を一口食べた。

「こ、これは!？」

のリアクションの後、

「私は誰？」

此処は何処？」

と、天使になつて浮かび上がった。

浮かび上がった高島は、

「そう、私は今天国にいる!」

と言い、どこかへ飛んで行ってしまった。

「夏子ちゃん!？」

と、驚く樹花。

生簀の奴、何をしたんだ？

「樹花、俺と生簀のを比較してみる。」

「解った。」

樹花はそう言つて、俺の作った麻婆豆腐を一口食べた後、生簀の麻婆豆腐を食べた。

「どうだ!？」

俺は樹花に聞く。

樹花は天使になり、

「びつつくり!私は誰?ここは何処?」

と、浮き上がり、

「そう、天つ国だあー!私は今つ、天国にいるのだあー!

それに比べてお兄ちゃんの作った料理はっ、豚のエサあゝゝゝ!」
と、言い残してどこかへ飛び去ってしまった。

生簀の奴、マジで何をしたんだ!?

俺は生簀の麻婆を試食した。

すると、俺も二人と同様に天使の姿になり、

「美味すぎる!こんなもの今まで食べた事が無い!」

と、言い放った。

その後、俺は元の姿に戻り、生簀の麻婆を食べ尽くした。

「悔しいが、俺の負けだ。」

俺は生簀に負けた事を素直に認めた。

生簀はほくそ笑み、

「俺の勝ちだ。」

と言った後、

「約束通り名誉と地位を剥奪する。」

と、付け足した。

生簀は少し間を置き、キュレックスワームに変態した。

それを合図とするかのように、会場の招待客もサナギ体に変態した。

「オールワームか。」

俺は少々焦りながらそう言った。

キュレックスワームは生簀の幻体を出して言う。

「生身で俺達に勝とうなんて思っなよ?」

それに対して俺は、

「悪いが生身では無い。」

といい、自分の幻体を見せてやった。

「カスクワーム!?」

生簀は驚いた。

「そんなに驚く事か?」

「驚くに決まっているだろ。」

狙った獲物が友達の擬態だったらな。」

「待て、俺はお前と友達になった覚えは無い。」

「相変わらず釣れねえな野郎だな。」

キュレックスワームは笑って言った。

「釣れない奴で悪かったな。」

俺はそう言っすねてやった。

「す、すねるなよ・・・。」

「別に俺はすねてなんかいない!」

そう言っす、今度はふてくされてやった。

「まあまあ、そんな怒るなッて。」

友達だろ?」

そう言っす、キュレックスワームは俺をなだ宥めようとした。

「さっきも言っただが、俺はお前とは友達になった覚えは無い。」

いいか?過去現在未来、すべての時代において俺はもっとも完璧なワームだ!」

俺はそう言い、

「そんな俺と、お前のような凡虫ほんちゅうとの間で友情が成立すると思うのか!?」

と、指を差しながら付け足した。

今の発言でブチギレたキュレックスワームはいきなり殴りかかって来た。

が、ガタツクゼクターが飛来し、キュレックスワームの攻撃を受け止め、会場の入り口へと飛んで行った。

そこには、ガタツクゼクターを掴んだ加賀美が立っていた。

「変身!」

加賀美はゼクターをベルトに装着してガタツクに変身した。

「キャストオフ！」

ガタツクはゼクターホーンを展開した。

「cast off」

ガタツクはアーマーを弾き飛ばしてサナギ体を一掃し、

「change stag beetle」

と、ガタツクホーンを起こしてライダーフォームに移行した。

「クロックアップ！」

ガタツクはサイドバックルを押し、

「clock up」

と、クロックアップを発動した。

同時に、キュレックスワームもクロックアップをしてガタツクに近付いた。

両者は目にも留まらぬ速さで激闘を開始した。

そして3秒後、ガタツクはライダーキック発動した。

俺はゼクターを召喚し、ベルトに装着してカブト・マスクドフォームに変身し、直ぐにキャストオフした。

悪いが加賀美。お前の相手は俺だ。

「クロックアップ。」

俺はサイドバックルを押ししてクロックアップを発動し、目にも留まらぬ速さでガタツクに近付いて背中をぶん殴った。

カーンッ！

金属と金属がぶつかり合う音がしたのと同時にガタツクは振り向いた。

「天道？」

ガタツクは呟く。

俺はガタツクを蹴り飛ばし、

「お前の相手は俺だ。」

と言い放った。

「天道お前？どういう事だよ？」

「見ての通りだ。」

俺はガタツクに言った後、

「逃げる。」

とキュレックスワームに言った。

キュレックスワームはそれに従う様に逃げて行った。

「天道！？何故逃がした！？」

「倒すべきワームは俺が決める！」

「ふざけるな！？」

ガタツクは怒り狂って襲って来た。

俺はガタツクの攻撃を受け止め、

「落ち着け加賀美。」

と言った。

「五月蠅い！」

「冷静になれ加賀美！」

お婆ちゃんが言っていた。

男はクールであるべき・・・沸騰するお湯は蒸発するだけだと。」

俺はそう言ったが、ガタツクは容赦なく攻撃をして来た。

俺はそれを避け、腹に強烈なパンチを喰らわせた。

「ぐっ・・・。」

ガタツクは変身が解け、その場に倒れた。

第1章：料理対決！天道 総司VS生簀 一郎（後書き）

ベルクリケタスワームをキュレックスワームに変更しました。

第1章：陰謀

俺は目の前で気絶している加賀美を見つめていた……。

頭の中で天道とワームが俺に語りかけてくる。

『加賀美にトドメを刺すんだ！』

『ワームの言う事など聞くな！』

「……………」

正直五月蠅い。

俺はその場で、

「うわあああーっ！」

と叫んだ。

『五月蠅いぞ。叫ぶな。』

と、頭の中の天道とワームが一緒に言う。

クソッ！

俺はどうすれば良いんだよ！？

ワームとして加賀美にトドメを刺すか？天道として加賀美を助けるか？

色々と迷ったが、俺はどちらも選択せず、加賀美を置き去りにする事にした。

変身を解いた俺は、加賀美を置いて家路に着いた。

自宅では、生簀の料理で飛び去った樹花が戻って来ていた。

「お帰りお兄ちゃん！」

と、樹花が飛びついて来た。

「樹花、悪いんだけど……一人にしてくれないか。」

俺はそう言い、一人部屋にこもった。

部屋に入った俺は、ベッドに横になった。

俺は枕元にあったお婆ちゃんの写真を取り、

「教えてくれ……。俺はどうすれば良いんだ？」

と、語りかけた。

「って、写真が語る訳無いか・・・。」

俺は写真を元の場所に置くと、静かに目を閉じた。

翌朝、俺は普段通りに起き、樹花に朝食を作ってやった。

樹花は朝食を食べ終わると、

「行つてつきまーす！」

と、中学へ登校した。

リビングは急に静かになった。

その時、天道の携帯が呼び出しをする。

俺は天道の携帯を取った。

掛けてきたのは加賀美の上司の岬からだった。

俺は通話ボタンを押し、

「どうした？」

と、何時も通りに聞く。

岬は暗い声で、

「か、加賀美君が・・・。」

と、言った。

「加賀美がどうした？」

俺は聞く。

「加賀美君が・・・遺体で発見されたわ。」

「加賀美が・・・死んだ？」

「ええ。ZECTが確認をしたから間違い無いわ。」

今、ZECTの遺体収容所にいるわ。」

俺は電話を終えると、ZECTの遺体収容所に向かった。

「加賀美・・・。」

俺は加賀美の遺体を見て呟いた。

「犯人はマスクドライダーシステム装備者の可能性が高いわ。」

「え！？」

「検死の結果。加賀美君の遺体から少量のタキオン粒子が検出されたわ。」

ま、まさか・・・。

俺が無意識の内にトドメを刺してしまったのでは無いだろうか？
俺は恐る恐る岬に聞く。

「加賀美、何処で発見されたんだ？」

それに対して岬は、

「高島グループの式場よ。」

と答えた。

高島グループって・・・高島 夏子の父が社長をしているあの有名な会社か。

それに式場って、昨日俺が行った所じゃないか。

内心、俺は焦っていた。

「どうしたの天道君？顔色悪いわよ？」

と岬。

「い、いや。ちょっと具合が悪いんだ。」

俺は咄嗟に誤魔化した。

「それなら良いけど・・・。」

それより、田所さんから連絡があったんだけど、加賀美君がもう一人目撃されているの。」

「もう一人？」

「今生きてる加賀美君はワームの可能性が高いわ。恐らく、ベルトも彼が持つているでしょうね。」

加賀美がMRSの装備者に殺された。
マस्कドライダーシステム

その証拠に、加賀美の遺体から少量のタキオン粒子が検出された。

そして、もう一人の加賀美・・・。

全ては一つに繋がった。

犯人は俺では無く、加賀美に擬態したワームだ。

「岬、MRSには発信器が付いていたな？」

仇は俺が取る。奴の居場所を特定してくれ。」

「外に田所車が止めてあるわ。」

私から田所さんに伝えておくから彼にお願いして。」

「分かった。」

俺はそう言い、外に止めてある田所車に向かった。

俺は車内に入り、椅子に座ってモニターをチェックしている男に声を掛けた。

「あんたが田所だな？」

男は振り向き、

「そうだ。」

と答えた。

「岬から話を聞いている筈だ。ライダーベルトの在処を特定しろ。」

「今調べている。」

田所はそう言い、端末を操作した。

ピー

端末が高い音を出して何かを知らせた。

MRSガタツクのベルトの在処を察知した様だ。

突然だが、此処で時間は遺体収容所を出た頃に遡る。

「いやー、見事なもんだねー。」

と、影山が物陰から出て来て言った。

それと同時に、

「我々ワームが遺体に化けるなど朝飯前だ。」

と、影山に続いて物陰から出て来た間宮 麗奈が言った。

「まさかこんなに巧く行くとはね。」

と岬。

すると突然、ケースに入っていた全裸の加賀美が起きあがり、服を着た加賀美に擬態しなおした。

時間を戻し、田所車では・・・。

「加賀美の居場所を特定した。

東京湾の漁船ターミナルだ。」

「そうか。手間掛けさせてすまなかったな。」

俺はそう言い残し、漁船ターミナルに向かった。

ターミナルには、人を待っている加賀美がいた。

誰を待っているかは知らないが、奴が人に危害を加える前に抹殺せ

ねば大変な事になりかねない・・・。

俺は加賀美に向かって一歩ずつ前進していく。

「加賀美!？」

加賀美は振り向き、

「天道!」

と叫ぶ。

「お前に俺の名を呼ぶ資格は無い!」

俺が怒鳴り散らすと、カブトゼクターが飛来。

「散れ、ワーム!」

俺はゼクターを掴むとベルトにセットした。

「変身!」

「H E N S H I N !」

俺はカブト・マスクドフォームに変身。

「キャストオフ!」

俺はゼクターホーンを展開。

「cast off」

とアーマーを吹き飛ばし、

「change beetle」

と、カブトホーンを起こしてライダーフォームに移行した。

「ま、待て天道!俺は本物だ!」

加賀美はゼクターを召喚し、ガタツクに変身した。

「ほら、ガタツクにだってなれる!」

「ワームは擬態した者の全てをコピーする。変身出来ても可笑しくは無い。」

俺はそう言い、

「クロックアップ。」

と、サイドバックルを押してクロックアップした。

「one-two-three」

とフルスロットルを押してゼクターホーンを展開して元に戻す。

「rider kick」

と電子音が鳴り、ライダーキックが発動した。
俺はガタツクに回し蹴りを放った。

ヒューン！

ガタツクはもの凄いスピードですっ飛んで水に落ちた。

「clock over」

と、強制クロックオーバー。

「後はZECTに任せろ。」

奴の死を確認した後、マスクドライバーシステムを回収する。」

突然、影山が現れて言った。

俺は変身を解き、

「任せたぞ。」

と言に残し、昼を食べにビストロ・ラ・サルへ向かった。

「ひよりー、サバ味噌だ。」

サルに入った俺はいきなりそれを頼んだ。

「あら天道君。ひよりちゃんなら非番よ。」

奥から竹宮 弓子店長が出て来て言った。

「そうか。まあ良い。サバ味噌を作れ。」

「そう言うと思って、用意してあるわよ。」

と、竹宮は調理場に入るとサバ味噌を持って出て来た。

毎度毎度気が利く女だ。

俺は竹宮の作ったサバ味噌を口にした。

俺のよりは美味しくはなかったが、まあまあな味だった。

「いくらだ？」

俺は聞く。

「良いわよ。お金なんて。」

天道君、何時も手伝ってくれてるんだから。」

竹宮は微笑んで言った。

「成る程。バイト代から引くって訳か。」

竹宮は、

「ふふ。」

と、笑った。

腹ごしらえを済ませた俺は、岬の下へ向かった。

岬はかなり慌てていた。

「何を慌てているんだ？」

「て、天道君！？」

岬は驚いた。

「何があつた？」

「加賀美君が資格者に殺されたって本当なの？」

「何言ってるんだ？」

お前が俺に言つたんじゃないか。」

「私が？」

「電話で遺体収容所に来いと。」

「そんな事言つてないわよ。」

言っていない・・・。

どういう事だ？

「答える岬。今日は何処にいた？」

「それが・・・覚えて無いのよ。」

気が付いたら、変なところに閉じこめられていて・・・。

後で影山君が助けてくれたけど。」

「成る程。今回の件ZECTが関わってるみたいだな。」

俺は加賀美を捜す。お前はどこかに隠れている。」

俺はそう言い残し、加賀美を捜しに行った。

加賀美は、先ほどの東京湾で倒れていた。

「加賀美！？」

俺は加賀美に近付き、安否を確認した。

幸い、息はしていた。

俺は、加賀美が目を覚ますの待った。

暫くして、加賀美が目を開けた。

「天・・・道・・・。」

「加賀美、ライダーベルトはどうした？」

「お前が思いつきりすつ飛ばしたせいで海の底だ！」

「と言う事は、今頃ZECTが回収しているだろう。」

「どついう事だ？」

「俺達はZECTにはめられた事になる。」

「どうするんだよ？」

「お前が本物なら、偽物に化ける。」

「どうやって？」

「もういい。お前の少ない脳みそで考えたってどうしようもない。」

「え？」

「この件は俺が何とかする。お前は安全な場所に隠れている。」

俺はそう言い残し、ある場所へ向かった。

そこには、影山がいた。

影山は、誰かを待っている様な感じだった。

俺は、離れた場所から影山の様子をじっくり観察した。

それから程なくして、影山の下に加賀美が現れた。

恐らく、奴がワームだろう。

「約束通り、今日からお前がガタツクの資格者だ。」

影山は加賀美にライダーベルトを渡した。

そこへ突然、

「待て！そいつは偽物だ！」

と、もう一人の加賀美がやって来て言った。

「どっちが本物なんだ！？」

と、影山。

「影山さん、俺が本物です！」

加賀美はそう言った。

正真正銘のバカだ・・・。

影山は、そう言う加賀美を無視し、もう一人の加賀美に渡した。

「良くやった影山。」

と、ベルトを受け取った加賀美。

「影山さん！？」

「加賀美。お前には死んで貰う！」

そう言っ、ザビーゼクターを召喚した影山はザビーに変身した。それに續き、偽加賀美もゼクターを召喚し、ガタツクに変身した。加賀美が死ぬ。

俺はゼクターを召喚した。

飛来したゼクターは、ザビーとガタツクの前を横切っ、俺の下へやってきた。

ザビーとガタツクは振り向き、

「お前は！？」

と叫んだ。

「手の込んだ事をしやがっ。

お婆ちゃんが言っ、いた。

手の込んだ料理ほど不味い。

どんなに真実を隠そうとしても、隠されるものじゃないっ。

そう言っ、俺はカブト・マスクドフォームに変身した。

その後、直ぐにライダーフォームへ移行。

「ちっ！邪魔が入ったか。」

ザビーはそう言っ、退却してしまっ。

「逃げるのか影山！？」

ガタツクは怒鳴るが、ザビーに声は届かなかっ。

「天道！何時からだ！？」

「そんな事これから死ぬ者が気にすることでは無い。」

「死ぬのはお前の方だ天道！」

そう言っ、ガタツクはゼクターホーンを展開。

「cast off」

アーマーが吹き飛んでガタツクホーンが起きあがると、

「change stag beetle」

と、ライダーフォームに移行完了。

「クロックアップ！」

ガタツクはボタンを押し、

「clock up」

と、クロックアップを発動して接近して来た。

ガタツクはもう目の前だ。

どうする？

俺はカブトクナイガン・アックスモードを出し、

「お前に加賀美を名乗る資格は無い！」

と言い放って仮面を叩いた。

「clock over」

強制的にクロックオーバー！。

バキッ！

仮面が割れ、加賀美の顔が半分現れた。

「ば、馬鹿な！？

ダイヤモンドの刃でも傷つかないヒロノカネが一瞬で！？」

「このクナイガンもヒロノカネだ。

お婆ちゃんが言っていた。

どのんなものでも形あるものはいつか壊れるってな。

それにあのスピードだ。壊れてもおかしくはない。」

「クソッ！

クロックアップ！」

ガタツクは再びクロックアップをした。

すると、時間軸の歪みが発生し、半分程出ている顔がよぼよぼの年

寄り顔になってしまった。

「な、何が起こってるんだ！？」

「お前は仮面が半分しか無い。

その状態でクロックアップをした為、身体が対応しきれなくなって

年を取ってしまったんだ。」

「クソッ！」

ガタツクは変身が解け、ただの砂になってしまった。

にしても加賀美の奴。

何で此処が解ったのだろうか？

第1章：陰謀（後書き）

マスクドライダーシステム
MRSってそんなに危険なものだったのか！？

第1章：スランプ

「うつ、何これ。」

不味^{まず}い……。」

突然、朝食を口にした樹花が言った。

「俺の作った料理に限ってそんな事ある筈が……。」

そう言いつつ、味見をする俺。

「不っ味っ……。」

「どうしたのお兄ちゃん？スランプ？

……。うつ……。」

樹花は、口を抑えて便所へダッシュした。

吐くほど不味かつたらしい。

にしても、どうしちまつたんだ俺？

生簀に負けてからずっとこれだ。

生簀に何かされたのだろうか？それとも、俺の味付けミスか？

「うつ……。」

突然、吐気が俺を襲った。

だが、俺は何とか耐え抜いた……。つもりだった。

やっぱり我慢出来ねえ！

「樹花ー、早くしろー。」

と、俺は締め切られた便所の前で言った。

「ちよつと待ってお兄ちゃん……。」

トイレ内で樹花の声が響いた。

未だに続いているらしい。

仕方がない。外の空気を吸ってこよう。

俺は自宅を出ると、更に吐き気が強くなった。

耐えられない。吐きそうだ。

それに……。それに。蝉^{せみ}の鳴き声が五月蠅くてたまらん！

おかしくなりそうだ……。

「うおおおお！」

俺はその場で叫び、本来の姿に戻った。

「キヤアアッ！」

突然、自宅の前を通りかかった買い物帰りのほしのあきに近い美女人女性が俺の姿を見て悲鳴をあげた。

女性は荷物をその場に落とし、尻餅をついてしまった。

俺はその女性に近付いた。

「こ、来ないで！」

女性は酷く怯えながら言った。

が、俺は俺の意思で近づく。口から針の様に細い管を出して……。女性の目の前まで来た俺は、その場で止まって女性を抱き抱え、細い管を首に刺して体液を啜った。

「あつ……。あ……。あ……。あつ。」

女性は体液が全て無くなり、干涸らびて死んだ。

その様子を、傍で男性が見ていた。

男性は悲鳴をあげて逃げ出した。

が、俺は目にも留まらぬ速さで男性の前に移動した。

「うわっ！」

男性はかなり吃驚した様子で立ち止まった。

と言うか、驚いて足がすくんでしまっている。

俺は無抵抗な男性に管を刺し、先ほどの女性と同じ運命を辿らせてやった。

美味い。もつと啜らせる……。

俺は町中を歩き回り、人間を見付けては片っ端から体液を啜って行った。

俺が通った道には、体液を啜られて干涸らびた人間の遺体が無造作に転がっている。

俺は体液を求め、再び歩き出した。

暫く徘徊を続けていると、ビストロ・ラ・サルの前にやって来た。た。

ガチャ。

ひよりがサルから出て来た。

ひよりは、俺の姿を見ると、慌てて逃げ出したが、俺はそうはさせまいとひよりの前に回った。

ひよりが俺にぶつかり、尻餅をついた。

「はっ！」

ひよりは俺を見て驚愕した。

俺が管を出し、ひよりにそれを刺そうとした時、

「待て！」

と、何者かがいきなり蹴りを入れてきた。

そいつは、ガタツクだった。

危機一髪の所でガタツクに助けられたひよりはサルの中へこもってしまった。

「ひよりには、手を出させない！」

ガタツクはそう言つて、ダブルカリバーで攻撃をしてきた。

俺は素早く避け、反撃を行った。

ガタツクは、めっちゃめっちゃ弱かった。

俺はガタツクが怯んでいる隙にその場から逃げ出した。

気が付くと、俺は自分の部屋にいた。

今まで自分が何をしていたのか全く思い出せない。

どうしちまったんだ俺？

それより、腹が減った。

俺は、ビストロ・ラ・サルへと向かった。

「ひよりー、サバ味噌だ。」

俺は店に入るなり、いきなりまかないを注文したが、今のひよりはそれ所では無かった。

「ひより……。もう泣くなつて。」

そう言つて、加賀美はひよりにハンカチを渡した。

「何かあったのか？」

俺は加賀美に聞いた。

「さつき、ひよりがワームに襲われててさ。助けてはやっただけ、この様で。」

「それで、ワームはどうなった？」

「それがさ、逃げられたよ。」

あのカブトムシの格好をしたワーム、かなり早くてさ。」

「そうか。」

ん？

カブトムシの格好をしたワーム？

「加賀美、そいつの特徴は！？」

「うーん、何て言うか、カブトのライダーフォームにそっくりだったな。」

そっくり・・・。

もしかして、俺か？

あそこで記憶がぼっかり欠けてるけど俺か？

無意識の内に俺が何かやったのか？

「うわっ！」

いきなり激しい頭痛が走った。

俺はサルを飛び出してしゃがみ込む。

「天道！？」

と、加賀美がサルから出てくる。

「来るな！」

「天道？」

「俺から離れる加賀美！」

「どしたんだ天道？」

「うおおおおお！」

俺は再び叫ぶと、本来の姿に戻った。

「そ、そんな、馬鹿な・・・。」

と加賀美。

第1章：スランプ（後書き）

カスクワームの新情報。

どうやらカスクワームは偶に人の体液を啜らないと理性を失ってしまうらしい。

また、その他にも沢山の能力があるが、此处では伏せておこう。

第1章：不死身

加賀美は俺の本来の姿を見て、

「そ、そんな、馬鹿な……。」

と呟いた。

俺は加賀美の存在に気付くと、何の理由も無しに襲い掛かった。

「待て！」

突然、俺を止めるかの様に神代が現れて言った。

「お前の相手は俺だ。」

そう言っていると、

「start！」

と、サソードゼクターが地面から現れ、神代の手に納まった。

「変身。」

神代はゼクターをサソードヤイバーにセットしてサソードに変身した。

「キャストオフ。」

サソードはゼクターニードルを本体に連結させ、

「cast off」

と、俺を目掛けてアーマーを吹き飛ばした。

俺はアーマー乱舞を間一髪の所で避けきった。

「change チェンジスコピオン scorpion」

と、ライダーフォームへ移行したサソード。

「ぐぎぎ……。」

俺は唸ると、クロックアップをして一気に間を詰めた。
グサッ！

俺の腹にサソードヤイバーが刺さった。

その後直ぐ引っこ抜き、

「ライダーラッシュ！」

と、サソードはゼクターニードルを奥まで押し込み、

「rider slash」
ルアイタースラッシュ

の電子音と共に俺の身体切り裂いた。
ドーン！

俺は爆発を起こし、粉々になって散らばった。
サソードはゼクターを外して変身を解いた。

これで終わったと思うなよ。

俺は散らばった破片を一つ残らず集め、合体させると復活をした。
が、神代はそれに気付いていない。

俺は神代の背後に立った。

加賀美が俺を指差し、

「う、う・・・後ろ！」

と叫んだ。

「何？」

神代は振り向いた。

「馬鹿な！？俺は倒した筈だぞ！」

神代は驚きと共に冷や汗をかいた。

俺は神代に抱きついた。

「離せワーム！」

神代は怒ると同時に俺を突き飛ばそうとした。
が、いくら力を入れても離れない。

俺は神代の身体を自分の身体へ徐々に取り込む。

「何が起こってるんだ！？」

と神代は叫ぶ。

それに対して加賀美は、呆然と立ちつくしているだけだった。

「えーい加賀美！俺を助ける！」

じいやが言っていた！

高貴な振る舞いには高貴な振る舞いで返せつてな！

今此処でお前への貸しを返せ！」

神代はそう言うが、その言葉も空しく、肉体は完全に吸収された。
「シャアアッ！」

俺は加賀美をも取り込もうと近付いたが、いきなり天道に擬態してその場に倒れてしまった。

我に返った加賀美は、

「天道！」

と俺を揺さぶった。

程なくして、俺は目を覚ました。

最初に加賀美が見えた。

「か、加賀美っ・・・俺は・・・一体？」

この時加賀美は思った。

こいつ、自分がワームだと言う事に気付いて無いのか？と。

「あ、お、お前。急に倒れるから驚いたよ。」

加賀美は焦りながら言った。

誤魔化してるのはバレバレだ。

「加賀美・・・誤魔化すな。なっただろ？」

「な、な、なな、何の事だよ天道？」

「んっ・・・加賀美。」

俺がワームになったのを見たんだろ？」

「えっ！？」

お前、自分がワームだって事気付いてるのか？」

俺は起きあがってこう言った。

「俺を誰だと思っている？オレ様だぞ。」

世界人口60億人の中で誰よりも一番優秀な俺が自分の正体を知らない訳が無い。そう言う事だ。」と。

「じゃあ、あれは覚えてるか？お前がひよりを襲った時の事だ。」

「俺がひよりを？このオレ様に限ってそんな馬鹿な事はある得無い。」

俺は言い切った。

が、内心は、無意識の内に襲ったんじゃないか？そう思っている。

「天道。ワームって、復活するのか？」

「復活？」

「お前の事、神代がバラバラにしたんだけど、破片が集まって復活したんだ。」

「その事なら安心しろ。他の奴らには出来ない。」

「身体に取り込むのは？」

「それも俺だけだ。」

「そうか・・・。」

で、取り込まれた奴はどうなる？」

「エネルギーに変換される。解放する事は不可能だ。」

「それじゃあ・・・あいつはもう？」

「あいつ？」

「神代 剣だ！お前が取り込んだんだぞあいつの事！」

「俺が・・・取り込んだ？」

「まさか、それすらも覚えていないのか？」

「全く持つて覚えていない。」

俺はそう言った。

そう言うしか無かったのだ。

「それ・・・信じて良いのか？」

「信じたくなければ信じるな。」

この俺も何が起こってるのか全く理解出来ていないからな。」

「解った。もう少し様子を見よう。」

加賀美はそう言って去って行った。

第1章：不死身（後書き）

何か、カブトからもの凄く離れている様な気がするのは気のせいだろうか？

にしても、天道君最強です。

どんな敵が相手でも負けないだろう。

第1章：二人の岬

「ん・・・こ、此処は？」

と、神代が呟いた。

それに対して、

「ん？新入りか？此処は奴の体内だ。」

と、一匹のサナギ体が言った。

「貴様！？」

神代はサソードヤイバーを取りだした。

「人間よ。此処で変身する事は不可能だぞ。」

「ふっ、俺は全ての頂点に立つ男だ。俺に不可能は無い。」

神代は、ゼクターに來いと念じたが、ゼクターは来なかった。

「何故だ！？」

「言っただろ。此処では全てが無力。死ぬのを待つだけだ。」

「抜け出す方法は無いのか！？」

「一応、ある。」

「教える！」

神代はワームに寄る。

「奴が俺等を吐き出せば出られる。」

「奴？」

「そう。お前を取り込んだ怪物だ。」

「怪物って、お前等の仲間じゃないのか？」

「仲間？あんな怪物、仲間なんかじゃないね。」

奴は、我々ワームを取り込む悪魔だ。奴に従わない者は殺されたり取り込まれたりする。

回りを見てみる。」

神代は辺りを見回した。

回りには、ワームの死骸が沢山転がっていた。

「何だこれは！？」

「見ての通り。奴に取り込まれた者達だ。」

「それより奴つて一体誰なんだ!？」

「そ、それは恐ろしくて口に出来ない。」

「言え!」

「仕方ない。どうせ死ぬんだから教えてやろう。」

カスクワームだ。カブトムシの格好をしたワームで我々の中で最も恐れられている存在だ。

ん、どうやらもう一匹来た様だな。」

神代とワームは上を向いた。

すると、一人の人間が落っこちて来た。

「おい!何があつた!？」

神代は聞いたが、目の前の人間は硬直してしまっていた。

その頃、俺は・・・。

美味い。なんて美味いんだ。

と、ガタツクを前に人間の体液を啜っていた。

そんな俺に、

「もうやめろよ天道。可哀想だろ?」

と、ガタツクが言った。

俺はガタツクを睨み付け、こう言つてやった。

「貴様、俺の娯楽を邪魔する気か?」

と。

「いい加減にしろよ天道!」

ガタツクは俺を思い切りぶん殴った。

が、俺は手のひらで軽く受け止めた。

「俺を倒そうなんて考えない事だな。」

そう言つて、俺はガタツクを放り投げた。

「うおわー!」

ガタツクは数メートル程飛び、地面に墜落すると変身が解けた。クソッ!どうすれば戻るんだ!?

と、加賀美は思った。

「どうした。もう終わりか？」

俺は道路に寝そべっている加賀美の背中を踏みつけた。

「うわっ！」

加賀美は悲鳴をあげた。

「ちっ、手応え無えな。」

そう言っで、俺は加賀美を放置して次の獲物を探しに行った。

獲物は、思った以上に早く見つかった。

良く見ると、それは樹花だった。

樹花？

「うおおおお！」

と、俺は叫びながら天道に擬態し、意識を失った。

気が付くと、俺はリビングにある愛用の椅子に横になっていた。

「大丈夫お兄ちゃん？」

「んっ・・・樹花か・・・。俺、何でこんな所で・・・。」

「え？何も覚えてないの？」

お兄ちゃん、家の前で倒れてたのよ。」

倒れてた？俺が？

そうか・・・またなつたのか俺。

早いとこ原因を突き止めなくてはな。

俺は起きあがると、玄関まで行った。

「お兄ちゃん、寝てなくて大丈夫！？」

それに対して俺は、

「病院へ行くだけだ。」

と言が残して外へ出た。

とは言うものの、こんな真夜中に病院なんて・・・。

ブルルルルルル！

突然、携帯が呼び出しをする。画面には、岬の名前と番号が載っている。

「何だこんな時間に？」

「助けて！」

「どうした！？何があつた！？」

「わ、ワームに囲まれて・・・。」

「場所は！？」

「六本木よ！早く来て！」

岬はそう言い残し、電話を切ってしまった。

ブーブーブーと、一定の感覚で音が鳴る。

俺は電話をしまつとガレージに向かった。

俺はそこで、カブトエクステンダーにキーを差して回した。

キヤキャンキュルキュル、ブォオオン！

と、エクステンダーのエンジンが掛かる。

それとほぼ同時に、カブトゼクターが飛来した。

「道案内って訳か。」

俺はまたぐと、エクステンダーを発進させた。

カブトゼクターは、岬の下へと俺を先導する。

その頃、岬はワームに囲まれて身動きが取れなくなっていた。

「ギギギ。」

ワームが唸る。

その内の一匹が、岬の前に来ると、岬に擬態をした。

「私に擬態してどうするつもり！？」

と、岬は震えながら言った。

が、岬ワームは無言で岬に近付いた。

その時、カブトエクステンダー・エクスマードが目にも留まらぬ速

さでワームの群れを一掃した。

「何！？」

と、岬と岬ワームが同時に言う。

「clock over」

と、クロックアップが解除された。

俺はエクステンダーから降りると、

「どっちが本物だ？」

と聞いた。

「私が本物よ！」

と、岬が言う。

それに対して、もう一人の岬も同じ事を言った。
解らない・・・。

どっちが本物なんだ？

「確かめさせろ。」

俺はそう言って二人の肌に触れた。

が、全然解らなかった。

肌の感触、体臭、容姿、服装の全てを完全にコピーしてやがる・・・。

どうする俺！？続く！

第1章：二人の岬（後書き）

L I F E C A R D の C M ! ?

と言う訳で本当に次回へ回します。

第1章：ドッベルゲンガーには気を付ける！

「天道君。どっちか選んで。」

と、二人の岬が同時に言った。

俺は・・・俺は迷っていた。

運良く偽物を倒せたら良いがもし本物だったら・・・。

俺は意を決して左側にいる岬の腹にパンチを入れた。

「うつ！？」

左側の岬は、あまりの痛さに腹を押さえた。

「て、天道君・・・。よりによって何で私を？」

と、岬は顔を引きつらせながら言った。

「すまない。こうするしか無いんだ。」

俺はそう言つて、もう一度パンチをして岬を眠らせた。

岬はその場に倒れた。

俺はもう一人の岬の方を向いてこう言った。

「正体を見せる。」

岬は同様しながらもこう言った。

「ちよつと待つて！？私がワームだつて言つのか？」

「それしか考えられない。」

「そう・・・。じゃあ、お仕置きね。」

岬がそう言つと、眠っていた岬が俺の足を掴んだ。

ま、まさか！？

俺の脳裏にある光景が過ぎつた。

それは、二人の岬が両方ともワームだと言う事だ。

そして、その光景が今現実のものとなった。

そう、二人の岬が俺の前で同じ種族のワームに変態したのだ。

いや、良く見れば微妙に違う。

ベルパーワームとベルパーワーム　ロタぐらいの違いだ。

つて、こいつらそのベルパーワームじゃんか！

「お前等……。俺をはめたのか？」

ロタは岬の幻体を出し、

「何のこと？」

と言った。

「お前等が俺を呼んだんだろ？」

「いいえ。呼んだのは私よ。」

突然、後ろから岬の声が聞こえた。

俺は振り向いた。

そこには、岬が立っていた。

何だ、岬が……。えっ！？

何かこんがらがってきた。

コイツもワームか？

「な、何だか分からんが、お前等から始末してやる。」

俺はそう言つて、ベルパーワームとロタを瞬殺した。

その後、岬の方を見て言つた。

「お前は……。人間か？」

「何寝ぼけた事言つてるのよ？これを見て頂戴。」

岬は携帯の履歴を俺に見せた。

「確かに、俺へ掛けた事を証明している。

だが、これで人間だと言う証拠にはならない。」

俺がそう言つと、岬が一気に暗くなった。

「見付けたぞ！」

突然、加賀美の大きな声が聞こえた。

加賀美はガタツクに変身し、俺の下へ走ると、

「岬さんから離れる！」

と、体当たりをして来た。

「加賀美……。お前？」

「今度岬さんに近付いたら許さないからな！」

そう言つて、ガタツクは加賀美ナツクルを放った。

「待て加賀美！」

俺は咄嗟の判断で加賀美ナツクルを止めた。

「落ち着け加賀美。」

俺が言い、

「そうよ。落ちつきなさい。」

と、岬が続けて言う。

「お婆ちゃんが言っていた。

男はクールであるべき・・・沸騰するお湯は蒸発するだけだったな。少し頭を冷やせ加賀美。」

「天、道・・・」

ガタツクはそう呟いた後、

「信じられるか！」

と、もう片方の手で俺の顔面を殴った。

カン！

ヒビロノカネ同士がぶつかる音を立てた。

「か、加賀美君！？」

岬がガタツクを宥めようとするが、

「岬さん、逃げて下さい！」

と、岬を逃がそうとする。

「加賀美・・・」

俺を襲うとは何事だ？」

「五月蠅い！俺はお前を倒すんだ！」

そう言つて、ガタツクはガタツクバルカンを連射した。

俺はサイドバックルを押し、

「clock up」

と、電子音を立ててクロックアップをした。

連射されたガタツクバルカンの弾がゆっくりになる。

俺はその隙にガタツクの後ろへ回り込み、

「clock over」

と、再びサイドバックルを押しして自らクロックアップを解除した。

ガタツクは連射を止め、

「何処へ行つた!？」

と叫ぶ。

「こつちだ。」

俺はそう言つて、

「何!？」

と、ガタツクが振り向くのと同時に顔面をぶん殴つた。
バキッ!

ガタツクのコンパウンドアイにヒビが入った。

「くっ・・・。」

キヤストオフ!

ガタツクはゼクターホーンを展開。

「cast off」

と、アーマーが吹き飛び、

「change stag beetle」

と、ガタツクホーンを起こしてライダーフォームになった。
が、未だコンパウンドアイにヒビが入ったままである。

「格好悪いな。」

俺は思わず口にしてしまった。

ガタツクはお怒りになり、猛攻撃をしてきた。
が、俺は全て普通に避ける。

そこへ岬が間に入った。

「加賀美君! やめなさい!」

そう言つた岬だったが、俺を倒す事に夢中になっていたガタツクは、
誤つて岬に攻撃をしてしまう。

「うっ!？」

岬の顔面にガタツクの強烈な一撃が入った。

岬の顔には痣が出来てしまった。

「加賀美君? 何するの?」

岬は怒らずに聞いた。

いや、内心は怒っている筈だ。

「天道君、お願い。」

岬は何かを訴える様な目で俺に言った。

俺は3本の指を立て、

「加賀美・・・3秒以内に謝れ。」

と、ガタツクに言った。

「one」

と、一度目のフルスロットル。

「two」

二度目。

「three」

最後のフルスロットルを押した俺は、

「時間切れた。」

と言って、ゼクターホーンを展開し、ライダーパワーをチャージした。

「ライダーキック。」

ゼクターホーンを再び展開し、

「rider kick」

と、電子音が鳴り、それと同時に回し蹴りを放った。
ズドン！

と、爆発と爆音、それに爆風が起き、煙の中から加賀美と外れたバツクルが飛び出し、

「うおおあ！」

と、悲鳴をあげて地面に落下した。

「うわっ！」

俺は変身を解除し、その場に膝を付いて頭を抱えた。

「天道君！？」

と、岬が近寄る。

「離れる！俺から離れるんだ岬！」

俺は岬の事を考えて言うが、一步も動こうとしない岬。
寧ろ、俺を心配して目の前でしゃがんだ。

「うおおおお！」

俺は叫びながらワーム化した。

「天道君！？」

岬は驚いて立ち上がった。

俺は岬に気付くと、素早く立ち上がって抱き抱えた。

「み、岬・・・さん・・・。」

と、加賀美が呟く。

「て、天道君ワームだったの！？」

と、岬は再び驚く。

「岬、驚く事は無い。」

「驚いてなんかいないわ。

それより離しなさいよ！」

岬は怒りを露にした。

が、俺は離さなかった。

「さて、岬の体液はどんな味かな？」

俺は口から管を出した。

第1章：ドッペルゲンガーには気を付ける！（後書き）

岬さん絶体絶命のピンチ！

このまま天・・・カスクワームに体液をすすられて死ぬのか！？

第1章：天道帰還

俺は口から管を出した。

「貴方、私をどうするつもり？」

岬は聞くが、俺は問答無用で管を刺そうとした。

しかし、突然体が動かなくなった。

その直後、意識が別の世界に引き込まれた。

「ここは？」

俺は思わず漏らす。

すると、一人の男が現れて答えた。

「ここは俺の心の中だ。」
と。

「誰だ！？」

俺は問う。

男は人差し指を天に向けて言う。

「お婆ちゃんはこう言っていた。

天の道を往き、総てを司る男・・・俺の名は、天道 総司、と。」

「俺をこんな所へ連れて来て何の用だ！？」

俺が問うと、

「貴様を倒す為だ。」

と、俺と同じ姿をしたワームが現れて言った。

「貴様は！？」

「俺は天道 総司。天の道を往き、総てを司る男だ。」

「違う。ワームとしての名前を聞いているんだ！」

「カスクワーム。お前自身だ・・・。」

ワームはそう言った。

「俺・・・自身？」

そう呟いた瞬間、俺の脳裏に記憶の一部分が映し出された。

それは、ワームに襲われてる人を助け、ワームを粉碎する一部分だ

った。

「何だこれは！？こんな・・・俺は知らん！」

俺は言い切ったが、

「お前は知っている。自分を取り戻すんだ。」

と、ワームが言った。

「お婆ちゃんが言っていた。

自分の意志を貫けば自ずと道は開くってな。

さあ戻れ。元の世界へ。」

天道がそう言くと、俺の意識は元の世界へ引き戻された。

「何してるんだ岬？」

俺は岬を抱き抱えたまま問う。

「てっ、天道君！？何時元に！？」

「さあな。気付いたらこうだ。」

「そ、そう・・・それより、離してくれない？」

「あ・・・。」

俺は慌てて岬を開放した。

「正気を取り戻したか。」

突然、生簀が現れて言った。

俺は振り向き、

「生簀！？」

と言った。

「そのままその女を殺してしまえば良かったものを・・・。」

俺は鼻を鳴らし、

「俺は人は殺さない。

お婆ちゃんが言っていた。

人の命を奪う者は人生そのものが終わってるってな。」

と、得意語録を披露した。

「ならばもう一度変貌させてやろう。」

そう言つて、生簀はキュレックスワームに変態した。

「待て。その前に料理対決の再戦を申し込む。」

キュレックスワームは生簀に戻り、

「良いだろう。もう一度料理でお前を変えてやる。」
と、言って再戦を承諾した。

ルールは前回と同じ闇キッチンルール。

負けたら料理人としての地位と名誉を剥奪される。

審査は傍にいた岬が行う事になった。

テーマは味噌汁。

そして、料理対決を開始するゴングが鳴り響いた。

俺は先ず最初にお湯を沸騰させ、予め薄切りにしておいたダイコンを入れて火を通した。

その後、味噌を入れ、だしを取ると味噌汁が完成した。

「それじゃあ、先ずは生簀さんのから。」

そう言つて、岬は生簀の味噌汁を一口飲んだ。

その瞬間、岬は天使になつてこう言つた。

「ああ。天国よ。まっ淡泊なフグの切り身。それにあわせて、味噌のフォアグラを練りこんでいる。まさに芸術品！」

と。

続いて、俺の味噌汁。

こちらは、

「違う。表現の仕様がな。この味噌汁の味は、まさに天国よ！」

と、天使のまま言い、

「私が言えることは唯一つ。この味に比べたら、お前のはブタのエサあ！」

と、生簀に向けて言い放つて飛び去ってしまった。

「俺のが・・・豚の餌？」

生簀は疑問に思いながら俺の味噌汁を飲む。

「美味い……。俺の負けだ。」

だが、解らない。どうしてこんなに美味いんだ？」

生簀は問う。

「俺はダイコンを薄切りにして太陽光の下で風に晒した。」

「んっ・・・。」

そよ風をダシにするとはな・・・。」

「お前は自分の技と味覚に頼るあまり世界を見ようとしなかった。お婆ちゃんが言っていた。」

自分に溺れる者はいずれ闇に落ちるってな。

この勝負、俺の勝ちだ。」

終わった。これで全てが終わった。

そのつもりだった。

生簀は、目の前でキュレックスワームに変態し、俺を襲って来た。

俺は咄嗟に避け、カブトゼクターを呼んだ。

飛来したゼクターは自動的にベルトにセットされ、俺をカブト・マスキッドフォームへと変身させた。

「キャストオフ。」

俺はゼクターホーンを展開。

「cast off」

電子音が鳴ってアーマーが吹き飛び、

「change beetle」

と、カブトホーンを起こしてライダーフォームになった。

「one-two-three」

俺はフルスロットルを押し、ゼクターホーンを展開。

「ライダーキック。」

と、再び展開し、

「rider kick」

の電子音と共に、突進して来たキュレックスワームに回し蹴りを叩き込んだ。

ドカーン！

キュレックスワームは爆裂霧散。

俺は変身を解除して家路に着いた。

第1章：天道帰還（後書き）

ハイパーフォーム出そうかな？

第1章：夢ひより

「どうしたひより？」

俺は元気の無いひよりに声を掛けた。

「天道？」

ひよりは俺を見上げる。

「ボクの体、最近変なんだ。」

「単なる夏ばてじゃないのか？」

「そうじゃない。」

あの蟹の形をした化け物に言われた。」

蟹？ウカワームの事か。

「ボクが、ワームだって。」

「んっ、バカを言うな。そんなはず無い。ひよりは、人間だ。」

「そいつはワームだ。」

物陰から間宮 麗奈が現れて言った。

「貴様か、ひよりにつまらない冗談を言ったのは？」

「冗談では無い。」

今証拠を見せてやる。」

麗奈は右手を顔の前にあげると、蟹型ワーム・ウカワームに変態した。

ビューーン！

カプトゼクターが飛来し、俺はそれを掴んだ。

「ひより、逃げろ！」

俺はそう言い、一瞬だけチラッとひよりを見た。
！？

ひよりにサナギワームの幻体が重なっている。

そして、それは段々濃くなって実体化し、ひよりの体が薄くなって完全に消えた。

「ひより？」

嘘だああああ！？ひよりがワームなんて嘘だああああ！？
がばっ！

ベッドの上で目覚めた俺は、素早く起き上がった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ、夢か・・・。」

にしても、今のは何だったのだろう？

そうだ、樹花に朝食を作ってやらないと・・・。

俺はベッドから降りると、台所へ向かった。

さて、何作る俺？

俺が冷蔵庫を開けると、カブトゼクターが冷蔵庫から飛び出してきた。

「やれやれ、飯の前に仕事か。」

そう呟いた俺は、カブトゼクターと一緒に外へ出た。

俺はガレージに行き、エクステンダーに乗って発信した。

その間、ゼクターは俺の事を待っていた。

ゼクターは音を鳴らし、こっちだ、と言わんばかりに、俺を先導する。

そして、辿り着いた先は、雑木林だった。

ブオーン！

エクステンダーを止め、地に足を付けた。

「ひやああ！助けてくれえ！」

何者かが物陰から助けを求めながら走ってきた。

そいつは、俺を見付けると、俺を盾にするかのように隠れた。

「か、怪物だ！兎に角助けてくれ！」

男は脅えながら、俺にしがみついた。

「どこ行った！？」

男の出てきた方向から、ガタック・ライダーフォームが飛び出してきた。

「加賀美。」

「天道！？」

そっちにワーム来なかったか？」

「ワームは来ていない。」

「おかしいな。こっちに逃げたと思ったんだけどな。」
ガタツクは、そう言い残していなくなった。

「君、助かったよ。」

男が言い、俺が振り向く。

男は、無言でサナギワームに変態した。

！？

「安心しろ。命の恩人に危害を加えるつもりは無い。」

サナギワームは、男の幻体を出して言った。

「俺がワームの言葉を信じると思うか？」

「信じないのか？」

「生憎、俺はワームを倒さなければならない。」

ビュウーン！

カブトゼクターが手に納まる。

「変身。」

俺はゼクターをベルトにセットし、カブト・マスクドフォームに変身した。

「キャストオフ。」

ゼクターホーン展開。

「cast off」

アーマーが吹き飛ぶ。

「change beetle」

ライダーフォームへ移行完了。

俺は先攻を取り、サナギワームを数回パンチした。

サナギワームは下がりながら体勢を崩し、その隙に俺は追い打ちを掛ける。

が、サナギワームはフォリアタスワームへ脱皮をし、クロックアップで追い打ち乱舞を回避して後ろに回り込んだ。

俺は振り向きつつ、

「クロックアップ。」

と、サイドバックルを押す。

「clock up」

電子音が鳴り、クロックアップが発動する。

「手間を掛けさせやがって。」

俺は呟くと、パンチパンチパンチパンチパンチの連続攻撃。

フォリアタスワームはパンチ乱舞によって身動きが取れなくなった。

「潮時だな。」

俺はフルスロットルを押し、ゼクターホーンを展開した。

「ライダーキック。」

再び展開。

「rider kick」

電子音が鳴り、ライダーキックが発動。

俺はフォリアタスワームにライダーキックを放った。

ズドオン！

フォリアタスワームは爆裂霧散する。

「clock over」

ピヒュウーン

クロックオーバーした。

ビュウーン、ピキン！

俺は変身を解くと、家路に着いた。

第1章：シシーラワーム

「お前か、何の用だ？」

「『何の用ですか？』だろ？まあ良い、これをお前にやる。」

そう言つて、麗奈はゼクターらしき物を俺に渡した。

「これは？」

「ZECTが開発したハイパーゼクターだ。ZECTの研究室から奪取してきた。」

ハイパーゼクター。

それは、第二のカブトゼクターだった。

麗奈曰く、カブトを強化し、ハイパーフォームへと変形させるパワーアップ装置だそうだ。

「こんなものを俺に渡すとは、どういう風の吹き回しだ？」

「お前は知らなくて良い。」

そう言つて、麗奈は立ち去った。

「ハイパーゼクター、か。」

俺はそう呟くと、それをポケットにしまった。

「天道！」

加賀美が走つてやって来た。

「加賀美、何を慌ててるんだ？」

「ひよりが、ひよりが変なんだ。」

「詳しく話せ。」

「口では説明出来ない。兎に角サルに来てくれ。」

俺は加賀美と一緒にサルへとやって来た。

「ひより！？」

俺は見た、ひよりの背中に、緑色の4枚の羽が生えているのを・・・。

「ひより、それは何時からだ？」

「わからない。気が付いたら、ボクの背中に。」

ボク、どうなるんだ？」

「天道、ちよつと良いか？」

加賀美は俺を外に連れ出す。

「俺、思っただけで、ひよりは人間じゃないんじゃないか？」

「んっ、ひよりがワームだ、と？」

「ああ。」

「バカな事言うな。そんな事ある筈が無い。」

「だったら試してみるか？」

加賀美はゼクトカムを取りだした。

「これでひよりの体温を見れば。」

カタン！

俺はゼクトカムを弾いた。

「て、天道！？」

バキッ！

俺はゼクトカムを踏み潰して破壊するとサルに入った。

俺は店の隅で腕を組み、ひよりを見つめる。

確かに、あの羽は人間のものではない。

だが、俺は信じたい、ひよりが人間だと言う事を。

ひよりは、緑色をした渋谷隕石の残骸を取りだした。

「お母さん。ボクを、治して。」

ひよりは石に向かって言った。

その瞬間、緑の石が発光を始め、ひよりを緑色の光で包んだ。

やがて、光が消えると、そこにいたひよりはひよりでは無く、ウス

バカゲロウがモチーフのシシーラワームだった。

シシーラワームは自分の体を見る。

「ボクの、体が。」

ひよりの幻体が現れて呟いた。

なっ！？

あまりの出来事に、俺はショックで言葉を失った。

「天道、何て事をし……。」

サルに入って来た加賀美が、ひよりの姿を見て途中で黙り込んだ。
加賀美は、シシーラワームにゆっくりと近づく。

シシーラワームは、ひよりの幻体をしまうと、本能のままに加賀美を攻撃した。

「うおおあ！」

吹き飛ばす加賀美。

ガタン！

加賀美はテーブルに当たって床に落ちた。

俺は意を決してシシーラワームに近づく。

シシーラワームは、俺に気付くと攻撃をしてきた。

が、俺は攻撃を受ける瞬間に、カスクワームへと変態し、攻撃を受け止めた。

俺は天道の幻体を横に出す。

「落ち着けひより！」

天道の幻体と言う。

シシーラワームは、ひよりの姿になると、倒れて気絶した。

俺は天道に擬態。

「ひより！ひより！」

と、声を掛ける。

第2章：やられるカブト

「ひより！」

加賀美が叫びながらサルを飛び出した。

「待て、加賀美。」

天道がサルから出てきて言った。

加賀美は振り向く。

「ひよりの事は、俺が蹴りを付ける。

お前は家で昼寝でもしている。」

「お前、まさか、ひよりを？」

加賀美は、通り過ぎる天道を、目で追う。

「相手がワームなら、俺は非情に徹する。そして、倒す。」

天道は言い放つと、どこかへ行ってしまった。

加賀美もまた、どこかへ。

天道は、ある墓の前で、手を合わせて、お祈りをしていた。

「天道、来てたのか。」

突然の声に、天道は振り向いた。

「ひより……。」

天道は呟く。

「パアン！」

一発の銃弾が、天道の足下で跳ね、シャドウ隊が二人を囲む。

「そいつをこっちに渡して貰おうか。」

影山 瞬が顔を出して言った。

「ブーン！」

カブトゼクターが天道の下に飛来、天道はゼクターを掴んだ。

「ひよりは渡さない。」

天道はゼクターをバツクルにセットした。

「変身！」

「ヘンシン！」

天道はカブト・マスクドフォームに変身した。

「カブト……。」

そいつはワームだぞ!？」

「だからどうした？」

お婆ちゃんが言っていた。

例えば世界を敵に回しても、守るべきものがある、と。」

「お前達、撃て！」

影山が命令すると、シャドウ隊は標準をひよりに合わせ、マガジンブレードを連射した。

カブトは、ひよりを無数の弾丸から守るため、ひよりの前に鉄壁となって立った。

「キャストオフ。」

「カシャン！」

天道はゼクターホーンを展開。

「cast off！」

「ドフォン！」

アーマーが吹き飛び、カブトホーンが起きる。

「change beetle！」

電子音が発声し、ライダーフォームに移行する。

シャドウ隊は、アーマー乱舞によって、次々に倒れていく。

「クソ！」

「ブーン！」

影山の下にザビーゼクターが飛来し、それを掴んだ影山は、ライダープレスにセットする。

「変身！」

「ヘンシン！」

影山はザビー・マスクドフォームに変身した。

「キャストオフ！」

ザビーはゼクターを展開。

「cast off」

「ドフォーン！」

アーマーが吹き飛び、カブトを甚振る。いたぶ

「change wasp」

ザビーはライダーフォームに移行した後、先制攻撃を仕掛けた。

「クロックアップ！」

ザビーはバックルのスイッチを押した。

「clock up」

クロックアップしたザビーは、目にも留まらぬ速さで、カブトに接近する。

「逃げる。」

カブトはひより言うと、サイドバックルを押した。

「クロックアップ。」

「clock up」

クロックアップを発動したカブトは、迫り来るザビーの攻撃を、軽い足取りで受け流した。

攻撃を避けられ、怒ったザビーは、カブトにメガトンパンチをした。怯むカブト。

その際に、ザビーは追い打ちを掛ける。

「プットオン。」

「カシャン！」

カブトはゼクターホーンを戻す。

「put on」

カブトはマスクドフォームに戻り、ザビーの攻撃から身を守った。

「バカ目。」

ザビーは呟き、ライダースティングを発動する。

「rider stinging！」

「ズドーン！」

カブトはライダースティングを受け、数メートル吹っ飛ぶと、崖から海に転落した。

「ザヴァーン！」

海に潜るカブト。

ザビーはその様子を崖の上から見ていた。

程なくして、変身が解けた天道が、水面に顔を出した。

「っはぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・。」

息継ぎをする天道。

ザビーは変身を解き、そのまま去って行く。

第2章：妹

とある洞窟の中。

「目が覚めたか。」

目を開けた天道に、ひよりが声を掛けた。

「こ、此处は……。」

天道は、やつとの思いで呟いた。

「洞窟だ。誰も来ない。」

「そうか……。」

天道は起きあがるが……。

「んっ!？」

「まだ寝ている。」

ひよりは天道を寝かせた。

「俺は……俺はどうしたんだ？」

「お前は、あの蜂にやられて、海に落ちたんだ。」

「ザビーか……。」

ひより、何故逃げなかった？」

「それは、天道が、心配だったからだ。」

天道、どうしてあそこまで、ワームであるボクを？」

「言った筈だ。」

例えどんな時でも、お前を守る、と……。

それに、お前は、俺にとつて、かけがえの無い、妹だからな……。

「

「こんな時に、何の冗談だ？」

「冗談なんかでは無い。お前は、俺の妹なんだ。今、全て話そう。」

天道は言うつ、思い出すかの様に話を始めた。

「18年前、俺の両親がワームに擬態され、殺された。その時、お母さんの腹の中には、赤ちゃんがいた。

女の子だったら、”ひより”と名付けると、言っていた……。

その後、俺はお婆ちゃんに引き取られた。

天道は、お婆ちゃんの性だ。」

天道は間を置くと、再び口を開いた。

「そして、7年前……。」

俺は渋谷で、死んだ筈の両親……いや、両親に擬態したワームに再開した。その時だった……。渋谷に、隕石が落下し、俺達は瓦礫の山に埋もれた。

俺は運良く助かった。その時、俺は両親に擬態したワームを見た。助けを求めている。

だが、俺はそいつらを許せなかった……。俺がそいつらにトドメを刺そうとすると、”殺さないで”と、瓦礫に埋もれた少女が言った。それが、ひより、お前だ。

俺は二人にトドメを刺すのを諦め、お前の下へ駆け寄った。その時、瓦礫が振って来て、二人は下敷きになって死んだ。その後、俺はお前に、大丈夫、俺が傍にいる、と手を伸ばした。」

「それ、覚えてるよ。」

あれは、お前だったんだな。」

ひよりの目から、涙が滲み出て来た。そして、ぼたぼたと垂らす。

第2章：ハイパーフォーム

「ちょっと待ってる。」

天道は起き上がり、出口へ向かう。

出口では、加賀美が盗み聞きをしていた。

「ちょっと来い！」

そう言つて、天道は加賀美を、^{ひっけ}人気の無い所へ引つ張って行く。

天道はカブトゼクターを構える。

「真実を知られたからには、お前を倒さなければならない！」

天道はカブトゼクターをバツクルにセットする。

「待て、天道！」

加賀美が叫ぶ。

「変身。」

「ヘンシン！」

天道はカブト・マスクドフォームに変身した。

カブトは、カブトクナイガン・アックスモードを装備し、加賀美に襲い掛かった。

加賀美はとつさに避け、ガタックゼクターを飛来させ、ガタックに変身した。

「キャストオフ。」

「カシャン！」

カブトはゼクターホーンを展開。

「cast off！」

「ドフォーン！」

アーマーが、ガタック目掛けて吹っ飛ぶ。

角が起き、ライダーフォームに移行。

「change beetle！」

「キャストオフ！」

「カシャン！」

ガタツクはゼクターホーンを展開。

「cast off!」

「ドフォン!」

アーマーが吹っ飛び、アーマー攻撃を相殺。

ガタツクホーンが起き、ライダーモードに移行。

「change stag beetle!」

「クロックアップ。」

カブトはサイドバックルを押した。

「clock up」

クロックアップすると、カブトは目にも留まらぬ速さで、ガタツクへ接近した。

「Hyper clock up」
ハイパークロックアップ

電子音と共に、カブトの視界から、ガタツクの姿が消えた。
何が起きたのだろうか？

カブトは辺りを見回すが、ガタツクは見あたらない。

「Hyper clock over」
ハイパークロックオーバー

再び電子音が聞こえると、カブトは背後に気配を感じた。

カブトは、直ぐに後ろを振り向いた。

すると、カブトにそっくりな謎のライダーが立っていた。

「何者だ?」

カブトは、そのライダーに聞いた。

それに対し、謎のライダーはこう言った。

「お婆ちゃんはこう言っていた。

天の道を往き、総てを司る男・・・俺の名は、天道 総司、と。」

「天道 総司は一人で良い!」

カブトはそう言い、謎のライダーに攻撃をした。

が、軽く受け流され、反撃を受けて怯んでしまった。

謎のライダーは、バックルの横に付いているゼクターの角を倒した。

「maxim rider power! (マキシムライダーパワー!)」

電信音が発せられ、ライダーパワーがチャージされる。

「one!」

ライダーはフルスロットルを押した。

「two!」

二個目のフルスロットルを押す。

「three!」

最後のフルスロットルを押した。

「カシャン!」

ライダーはゼクターホーンを展開。

「ハイパーライダーキック。」

「カシャン!」

ライダーはゼクターホーンを再び展開。

「rider kick」

ライダーはカブトに回し蹴りを放った。

「ズドーン!」

カブトは変身が解け、爆裂霧散した。

「ガシャン!」

ライダーベルトが地面に落ちた。

ライダーは変身を解く。

「「ブーン!」」

二体のゼクターが同時に飛び去った。

「どうなってるんだ?」

ガタツクは聞いた。

が、天道は無視していなくなってしまった。

おまけ：ネタバレ

「rider sting!」

「ズドーン！」

カブトはライダーステイングを受け、数メートル吹っ飛ぶと、崖から海に転落した。

「ザヴァーン！」

海に潜るカブト。

「ハイパーキャストオフ。」

「Hyper cast off！」

「Change hyper beetle！」

ハイパーフォームになったカブトは、ハイパーゼクターのボタンを押した。

「Hyper clock up！」

ハイパークロックアップが発動し、クロックアップを超えるスピードで、カブトは脱出した。

程なくして、変身が解けた天道が、水面に顔を出した。

「っはぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・。」

息継ぎをする天道。

ザビーは変身を解き、そのまま去って行く。

第2章：ハイパーフォーム（後書き）

何か、書いてて良く解んねえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8702a/>

仮面ライダーカブト 3rd stage

2010年10月13日20時50分発行